

## (5) 正解の多様性

正解はただ一つであると思ひ込むことは、危険であり、また生き生きとした言語活動の展開の妨げにもなる。

たとえば、I don't know how to skate. I want you to help me. I wonder if you like fishing. は、それぞれ、I can't skate. Will you help me? Do you like fishing? とほぼ同じ意味である。表現形式や語いや正確さは違っていても、表現しようとする内容が汲みとれる限り、いろいろな答えを認めるという態度をもちたい。

また、このような態度は、常に平易な基本的な文型や語いを用いて、まず表現を試みようという態度の養成にもつながり、生徒の学習意欲を喚起することにも役立つものである。

たとえば、a house whose roof is red, It's ten years since our school was built. も結構であるが、a house with a red roof, Our school is ten years old. にも目を向けさせれば、正解への回路も多くなり、英語に弱い生徒でもやる気を起す機会がもてるようになる。

## (6) 音声面の指導

四技能のうち、「読む」ことについての指導の工夫は、ある意味では比較的に取りくみ易い面もあって、それなりの効果をあげつつあるが、他の三技能、とくに「聞く・話す」については、これからの指導の改善にまところろがまだまだ多い。

幸い、テープ・レコーダーの使用は常識になっており、LLの設置についても真剣な討議がなされ、すでにその活用の段階に入っている学校もかなり見つけられる。これらの教育機器の活用については、今後とも多面的な研究をつみかさね、実りあるものにしなければならないが、ともかく、生徒達が従来にくらべ、比較にならないほど native speaker の音声には接しており、教師が想像している以上に「聞き・話す」ことには興味もっている。教室は、生徒にとり英語による言語環境を構成し得る最も貴重な場であり、このような言語に対する基本的な興味にこたえるよう、聞く・話す活動を計画的に導入し、実践していきたいものである。

ここで音声指導上の留意点を文強勢を中心にして簡単に列挙しておく。(「所報」第2号を参照ください。)

- ① 英語のリズムと日本語のリズムの相違を知る。すなわち、前者は Stress-timed rhythm であり、後者は Syllable-timed rhythm である。
- ② 文強勢がどこにあるかの確につかむ。
- ③ 強勢のある音節は大きく長めに発音する。
- ④ 第1強勢をもつ語、および第1強勢をもつ語を含む語群は、まとめて発音され、1つの音声上の句 (phonological phrase) をつくる。たとえば、This book will be our text. という文は、text にのみ第1強勢をおけば、文全体が1つの phonological

phrase としてひと息で発音され、book と text にそれぞれ、第1強勢をおけば、2つの phonological phrase として、

This bóok / will be our téxt.

となり、ふた息で発音される。

- ⑤ 1文の中で、phonological phrase は、不必要に多くとらない。
- ⑥ phonological phrase が2つ以上ある場合、その間におく休止 (pause) は短かめにする。
- ⑦ 強勢をうけない語で、弱形 (weak form) と強形 (strong form) がある場合には弱形を用いるようにする。たとえば、Class has begun. has は [hæz] とせずに [həz] 又は [əz] とする。
- ⑧ (、+、)、(、+、) の stress pattern に注意する。たとえば、white shírt, tòd hót, gèt úp, wàt tíme; nótebòok, mílk bòttle など。
- ⑨ 第1強勢をうける音節の高低 (pitch) は、下降調 (、) と文の途中の切れめなどに起る継続維持調 (→) の phonological phrase の中にあっては、high pitch となり、上昇調 (、) の phonological phrase の中にあっては normal pitch となる。
- ⑩ 音声上の結びつき (linking) は、リズムに関係が深いので注意する。

## (7) 文化面の理解

人物や文化の交流が盛んになってきたとはいえ、外国の文化はわれわれの文化と異なる点が多い。この文化の相違点が理解活動の障害になることがある。例えば、"Every Friday night, Jack's mother gives him some money. He sometimes has a date with Jane at the drugstore. He pays for their food." という文章の中だけでも、週給制、週5日制、drugstore はくすり屋であるばかりでなく、小間物も売り、軽い食事もできる店であること、さらには米国の中学生男女の付き合い方などもうかがえるのであるが、これ等の風俗・習慣・文化面などについての理解を深めるための補足的な指導も大切なものになろう。

以上、わかる指導をめざしての英語指導上の留意点をのべてみたが、唯一で almighty な指導法はない。また、あまり指導法を変えることは、生徒の理解を妨げることにもなりかねない。教材と生徒の能力や実態に応じて指導を構成する要素とを最適に組み合わせて、生きた英語にふれさせながら学習を展開していくのが最善の道となろう。

最後に、L. Throne の言葉を引用しておきたい。

"If you want to teach somebody a language, then you simply soak him in it in every possible way."